

年間第5主日 A年

第一朗読 イザヤ 58・7-10
第二朗読 一コリント 2・1-5
福音朗読 マタイ 5・13-16

2026.2.8 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日の福音の中で、イエス様は、弟子たちに対して「あなたがたは地の塩である」、また「世の光である」とおっしゃっている箇所でしたけども、この「地」とか「世」と言わわれているのは、わたしたちが生きている人間の一つの現実を表しています。それは、自分の人生を自分で担っていかなければならないっていうか、あるいは自分のために色々なことをしなければならないという側面だと言うことができます。

度々申し上げているように思いますけれども、たとえば誰か他の人が代わりにご飯をたくさん食べてくれたからといって、わたしたちは自分がお腹いっぱいになることはできないわけです。自分の体を維持するためには、食物を自分で摂取しなければならないし、また人間として生きていく上では、そういう生命の維持ということだけではなくて、色々な喜びとか、自分なりの生き甲斐というようなことを見つけて、それを自分のものにしていくっていうか、自分のために生きなければならないというのが一つの現実で、それを「地」とか「世」というふうに表現していると言つていいように思います。それが人間の現実でありながら、しかしみんなが自分のためにだけ生きているならば、この世は本当に生きることができない場所になってしまふ。そういう意味で「地獄」になってしまふわけなんです。

そこで「天」との繋がりがどうしても必要です。その「天」というのは——宗教的に言うならば——どつか空の上というようなことよりは、神様の世界、あるいは神様にすべてを委ねる世界ということ。自分のことではなく他の人に心を向ける、あるいは他の人のために行動する、そういう人間に与えられたもう一つの側面です。それを「天」と表現していると言つていいように思います。

たとえば、自分のことばっかり考えているマリア様ってちょっと想像つきませんね。「自分の前に供えられているお花が気に入らないわ」みたいなことを言うためにご出現になっている、そういうのだと困りますね。むしろこの世のいろんな人々の苦しみや悲しみをご自分の悲しみとして受け取っていらっしゃるから、いろんな所でご出現があったりとかいうふうに、カトリック信者は信じてます。

そういう意味で、自分のことは神様に委ねて、そして他の人に心を向け、他の人のために行動するというのが「天」です。

だから、「地の塩」、「世の光」っていうのは、天と地——地にありながら天との繋がりを生きる者なんだっていうことです。光っていうのはまさに天から地に降り注いでくる、そういうものだし、「塩」というのは旧約聖書で言えば、神様への捧げ物に振りかけるっていうか、あるいは神様と神の民の契約そのものを表しているんです。塩というのは、旧約聖書においては、「永遠」とか「変わらない」っていうことを表すそういうアイテムなんです。だから、神様との関係、つまり天と繋げる。

だから、自分のために生きなければならないという、そういう現実の中にありつつ、しかし他の人のために心を向け、他の人のために行動することを通して、この世を地獄ではなくて、本当に人間が生きられる場所にしていくというのが、一人ひとりの人間の中に備わっている神様から与えられた恵みであるし、そのことを特に意識するために呼び集められたのがイエスの弟子たちなんだ。ひいては、わたしたちもその弟子として自覚しているならば、キリスト信者なんだ。そしてそれを思い起こすのがこの礼拝なんだということができます。

そうならば、みんなが「天の父をあがめるようになる」っていうのは、ただ礼拝に参加するとかそういうことではなくて、他の人に心を配り、そして生かされているっていうことの素晴らしさに出会っていく、あるいは自分自身がこの世界に生きている、他の人と共に生きているということを恵みとして受け取ることができるようになる。それが「天の父をあがめるようになる」っていうことの表している内容に思います。

でもここに一つ、「あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい」（マタイ 5・16）っていう言葉がちょっと良くないんじゃないかなと思います。もともとの新約聖書は——古代のギリシャ語で書かれているわけですけども——三人称の命令形なんです。

日本語に三人称の命令形って直接の文法的にはないかもしれないんですけど、本当は、「あなたがたの光が人々の前に輝け！」って、光に対してイエス様が直接命令してるんです。わたしたちが輝かさなきやつていうようなことではない。

たとえて言うならば、昔、子どもたちが転んだりなんかして痛いときに、周りの大人が——お母さんとか、周りの先生とか大人が「痛いの痛いの飛んでけ！」って言いました。その「痛いの痛いの飛んでけ！」は、ニュアンスとしては三人称の命令形です。「あなたの痛みをどつかに飛ばしなさい」じゃないですね。「痛いの」そのものに向かって「飛んでいけ」、それを言ってくれるから、痛いのは飛んでいくんだ。

そういう感じで、あなたがたの中の光、あるいは天との繋がりが人々の前に輝けって、イエス様が願いを込めておっしゃっている。それは招きでもあるわけです。そして、イエス様ご自身、神様ご自身がそう言ってくださる言葉は必ず実現するんだと、自分の中にその光がないように思っても、でも「あなたがたの中の光が人々の前に輝け！」ってイエス様が言ってるんだから——イエス様にはわたしたち勝てないですから、どんな闇があってもです——だからそれは、命令と言うよりは必ず実現するっていう希望の言葉。立派になって、そしてみんなを恐れ入らせなさいみたいなことではないわけです。

そういうようなわけで、わたしたちがそれぞれ自分のために生きなければならない中にありながら、しかし他の人のために心を向けることを通して、この世界がわたしたちが生きることができる場所になるんだ。そのために神様は恵みを注いでくださる。そういう思いで、わたしたちはそれを思い起こすためにこのミサがあるし、そしてまたミサの中でわたしたちが拝領するご聖体っていうのは天からの恵みだから、自分のために拝領するんじゃないんです。普通の食べ物だったら他の人が食べたからといってわたしの体は養われない。しかしご聖体は天からの恵みだから、その自分を通して、わたしが今本当に助けを必要としている他の誰かになり代わって恵みをいただきますっていうつもりで受けるように、招かれているのではないかなと思います。それを通して、天の恵みでわたしたちが互いに繋がっていく。そこへ招かれているのが——

招かれているのはすべての人です——、そしてそれをいつも意識して証しし続けようとするのがキリスト信者です。

わたしたちが、日々捧げているミサを通して、天との繋がりの恵みを生かされて、まさに「あなたがたの光が人々の前に輝け！」っておっしゃっているイエス様のみことばがわたしたちの生活の中に実現していきますように。このごミサを通して、その呼びかけに心を開く思いで、恵みを受け取りたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>
携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>